

## 行政視察等報告

(会派 燦友会)

### <視察目的>

#### ・千葉県館山市

過去 10 年間で 200 組以上の移住者を迎えている移住・定住先進地の館山市の取り組みを調査・研究し、参考にするため。

#### ・地方議員研究会研修会（東京都新宿区早稲田）

今年 6 月に施行される民泊新法や民泊の現状等について調査・研究し、参考にするため。

#### ・神奈川県三浦市

病院の存続さえ危ぶまれる経営状況から、地方公営企業法全部適用化の取り組みを契機に、医師の招聘や地域医療連携など多岐にわたる経営改善策を実践され、三浦市立病院を再興させた取り組みなどについて調査・研究し、参考にするため。

### <視察概要一覧>

| 視察月日                       | 視察・研修先        | 視察施設             | 視察内容                               |
|----------------------------|---------------|------------------|------------------------------------|
| 平成 30 年<br>1 月 10 日<br>(水) | 千葉県館山市        | 渚の駅たてやま          | 移住・定住、空き家バンク事業について                 |
| 平成 30 年<br>1 月 11 日<br>(木) | 東京都新宿区<br>早稲田 | 早稲田大学<br>大隈記念タワー | 地方議員研究会研修会<br>「地域が豊かになる民泊の実例・基礎知識」 |
| 平成 30 年<br>1 月 12 日<br>(金) | 神奈川県三浦市       | 三浦市立病院           | 三浦市立病院の<br>経営形態の見直しについて            |

### <視察概要報告>

#### 1. 千葉県館山市

●対応者： 上田市議会 議長 榎本 祐三様  
NPO 法人 おせっ会 理事長 八代 健正様  
館山市経済観光部商工観光課雇用定住係長 行縄 俊一様  
〃 主任学芸員 池田 英真様  
館山市議会事務局 関口 様

●場 所： 館山市役所 渚の駅たてやま内 名誉駅長室

●概 要：「移住・定住、空き家バンク事業について」

元祖「田舎暮らし」ともいえる館山市では、移住を希望する方の「住んでからを考

える」を第一に、NPO 法人「おせっ会（会員数 70 名）」と連携し、官民一体での移住者支援を実施しておられます。NPO 法人「おせっ会」は平成 18 年館山商工会議所青年部の取り組みとしてスタート、平成 21 年に法人化されました。その後空き家バンクを創設し、平成 24 年に館山市から事業委託（委託金 400 万円/年）され、年間を通して移住相談の窓口（現在相談体制 3 名）も開設しておられ、実績を上げておられます。過去 10 年間の相談件数は 1140 件（2127 名）、移住完了者は 201 組（411 名）で素晴らしい実績を上げておられます。

NPO 法人「おせっ会」の主な取り組みは①館山市を知ってもらう事業（移住先としての館山・南房総エリアのプロモーション、移住体験プログラム企画・運営）②移住を具体的に計画へ進める事業（移住相談業務）③移住者をまちのチカラにつなげる事業（地域イベント企画・運営（交流会、安房コンなど）、空き家活用事業（空き家バンク、古民家再生））です。視察研修では、NPO 法人「おせっ会」理事長の八代健正様に取り組み状況を説明いただき、意見交換をしました。その後、さかなクンさんが名誉駅長を務める「渚の駅たてやま」の館内などを見学させていただきました。



#### 〈考察〉

- 南房総館山市は人口 47,573 人、面積 110.05 km<sup>2</sup>で年間気温 16℃以上。冬でもめったに雪が降らない温暖な地域でもある。NPO 法人「おせっ会」（会員 70 名内役員 18 名）は、平成 18 年に館山商工会議所青年部の活動のなかで、人口減少という地域課題に取り組むべく、平成 21 年



には特定非営利活動団体としての千葉県より承認を受けられました。毎週月曜日から土曜日までの 9:00~16:00 予約制として、移住相談窓口（東京都内各地で移住相談会を開催）を開設して、移住における様々な不安を気軽に相談にのり、闇雲に移住

を進めていくのではなく、「住んでからを考える」計画の立て方を大事にして、移住のお手伝いをしているとの説明でした。

移住者からは「住まいづくり」「まちづくり研究」「起業」と様々。伺うと「土地探しで大事なことは、その土地での生活をどれだけしっかりとイメージできるかということ」「自分が暮らしたいまち、暮らしやすいまちを創る」。そんなことができるのは都心部ではなく地方だという思いがある。

平成 20 年から 29 年までの NPO 法人「おせっ会」への相談件数 1,140 件（2,127 名）うち移住完了 201 組（411 名）。ただ単に移住人口を増やせば良いのではなく、館山市に住んでからどう暮らすか？安来も学ぶべきところがある。（金山）

- 初めに館山市議会議長より歓迎の挨拶をいただきました。そのなかで合併を目指したが至らなかった訳、財政が厳しかったこと、それを乗り越える苦労等をお聞きした後、調査項目について研修させていただきました。

説明は NPO 法人「おせっ会」の理事長よりいただきました。1. 館山市を知ってもらう。2. 移住相談を受ける。3. 移住を具体的に計画へ進める（移住体験）4. 移住者をまちのチカラにつなげる。そして幸せな移住生活を送っていただく。活動の成果は 10 年間で相談件数 1,140 件 2,127 名 その内移住完了 201 組（411 名）の実績でした。

そして最終的に目指すものは「命のリサイクルができるとき」解散するということでした。明確な目標と移住者の立場で考えながら取り組んでおられる姿は、大いに見習うべきだと思います。（遠藤）

- まず驚いたことは移住先としてのプロモーションには、あまり意識して取り組んでいないとのこと。しかしながら mixi や facebook、twitter、HP など当初から情報発信したことで、若い人がその情報を見、拡散したことが館山市を知ってもらう大きな力となったとのことでした。改めてインターネットによる情報発信の大切さを痛感しました。また空き家バンク事業については、物件が集まらないなど苦戦されているということでしたが、近年は地区を絞り、人と人のつながりによって空き家活用事業を進めておられ、一定の成果を上げておられるとのことでした。移住・定住を進めていくためには、最終的には人と人のつながりが大事だということを再認識させられました。館山市は、NPO 法人が主体となって移住定住事業を担っておられます。安来市でそういうことができるのかを考えると、NPO 法人をはじめ、ボランティア団体への支援などを議論する必要があると思います。（作野）

## 2. 地方議員研究会研修会

●対応者： 早稲田大学環境総合研究センター 研究院准教授 永井 祐二様

●場 所：早稲田大学大隈記念タワー（東京都新宿区早稲田）

●概 要：「地域が豊かになる民泊の実例・基礎知識」

《地域再生に活用する集落の事例とその戦略》というテーマで早稲田大学環境総合研究センター研究院准教授永井祐二氏より研修を受けました。

研修は主に 3 つの項目（①民泊に関わる制度とその課題②民泊の実例に見る成功の

秘訣③民泊から広がる地域活性化)に分けてそれぞれ説明があり、その都度意見交換をしました。

①については、訪日外国人観光客増加への期待、農山漁村滞在型余暇活動への期待、旅行客の消費による大きな経済効果、空き家・空き部屋の活用などによる地方創生などについて説明がありました。②については、香川県の離島 豊島の民泊事例を紹介され、データやアンケートそして予約システムなどについて説明がありました。③については、農水省の農泊の取り組みを中心に説明がありました。

#### 〈考察〉

- 民泊の成功事例としてあげられたのは、香川県小豆島 土庄町豊島（人口 1018 人

468 世帯、高齢化率 44.5%）。戦後最大級と言われた産業廃棄物不法投棄事件もあった島でもある。風評被害から「瀬戸内アートの島 豊島」としてスタート。「自然とアート」を新たな観光資源として来島者は 17 万人超。新たな課題として宿泊難民や食事難民も発生。豊島住民は我が家を民泊として開設。取り組みはあくまでも本業ではなく副業（年 14 名泊、売り上げ 49,500 円から年 496 名泊、売り上げ 2,369,500 円まで多々）。



民泊 1 軒としては、無理をせずに分業にて、「民泊させる人」「料理を提供する人」「農地を提供する人」「漁業体験を行う人」等、互いに分担をしてやれるようにして、グループを組み、地域全体で関わっていると感じた。

民泊・民食によって豊島には、地域ネットワークが出来上がってきている。中山間地域を多く抱える安来市にあっても、農泊は考えてみる余地はある。インバウンドの増加、観光客の増加を「地域の遊休資源の利活用へ」「地域の所得拡大」「農家所得の向上」また移住者増にも繋がるのではと期待してみた。（金山）

- 民泊による期待や経済効果について、空き部屋・空家の活用による地方創生。地方においては、民泊というより農泊に期待するということ。農水省の取り組みによる農山漁村滞在型余暇活動への期待が大いにあるということだそう。安来市も一考の必要があるかも？（遠藤）
- 今年 6 月に施行される民泊新法。安来市には年間 60 万人を超える観光客が来ておられる訳ですが、ビジネスホテルやシティホテルと言われる宿泊場所はありません。またこれらの観光客が地域と交流したり、地域にお金を落としていただく機会もそう多くはありません。これらを打開する方法として、民泊は非常に有効な手段だということを改めて認識しました。高齢者でもお金をかけず気楽に始めることができる民泊は、現状の安来市にマッチした制度だと思います。「体験する」をキーワードに一日でも早く、取り組んでみる価値は十分にあると感じました。（作野）



### 3. 神奈川県三浦市

|       |          |              |        |
|-------|----------|--------------|--------|
| ●対応者： | 三浦市立病院   | 総病院長         | 小澤 幸弘様 |
|       | 〃        | 事務局長         | 佐藤 安志様 |
|       | 〃        | 事務局総務課長兼栄養課長 | 矢尾板昌克様 |
|       | 〃        | 事務局医事課長      | 石塚 真司様 |
|       | 〃        | 事務局総務課主査     | 金枝 晃芳様 |
|       | 三浦市議会事務局 | 議会総務課        | 平松 恭輔様 |

●場 所： 三浦市立病院

●概 要：「三浦市立病院の経営形態の見直しについて」

総務省は平成 19 年 12 月に「公立病院改革ガイドライン」を策定し、これによって全国の公立病院は、これを踏まえ公立病院改革プラン（安来市立病院も）を策定し、「経営の効率化」、「再編・ネットワーク化」、「経営形態の見直し」の 3 つの視点に立った改革を推進し、一定の成果を上げてきている。

その中でも今回視察した三浦市立病院は、「経営形態の見直し」の部門で、総務省の「公立病院経営改革事例集」に成果を上げている公立病院として取り上げられています。視察ではまずこの事例集をもとに、改革をせざるを得なかった状況、収入確保策や費用の削減対策の主な取り組みと効果などについて詳しく説明を受け、意見交換させていただきました。終了後、院内を見学させてもらい、現場の様子も説明いただきました。



#### 〈考察〉

- 神奈川県三浦市で唯一の総合病院として 1952 年の開設以来、地域の急性期医療を支えてきた三浦市立病院。2007 年突然に大学医局からの医師供給が途絶え、「小児科の入院」「時間外救急対応」「産科」を中止せざるを得なくなり、赤字基調だった経営は急速に悪化した。民間移譲の話もある中、民間的手法を取り入れるため病院事務長を公募。隣接する横須賀市に高度急性期機能が充実していたため、高度急性期機能は地域連携で確保。1 次および 2 次救急の受け入れを中心とした地域急性期機能を重視。これまでの方針とは真逆に、少なからず院内はざわついたとのこと。しかし「持つべき機能」を明確にしたことは英断であったとの説明があった。

高度急性期志向から地域急性期病院へ理念を共有することにより、院内に病院が生まれ変わるという意識が浸透する。市民を支える総合病院として、在宅診療・介護

連携も推進。「三浦市民が求める医療を行ってこそ、三浦市立病院の存続ができる」が病院長の信念とのこと。

地方の公立病院の経営悪化。例外的でなく安来市立病院も赤字基調。そして「病院改革プラン」も既知として進まない。職員のモチベーションを保ちつつ、改革を進めるためのひとつとして、三浦市立病院は駐車場を無料から有料に切り替えたと同じ、安来も検討すべき時期に入ったと感じた。やはり今の時代、患者満足度を高めていかなければ、選ばれる病院にはなりません。(金山)

- 当病院は平成20年に事務長を民間人から採用し、それまで赤字経営であった病院経営を正常な経営（黒字化）への転換を図った。22年からは地方公営企業法全部適用に踏み切り、経営責任者に自立的・効率的な経営を求め、23年には画期的な黒字化が達成されている。それは、病院経営に係る主要課題を明確にし（1）資金不足の解消（2）赤字体質からの脱却（3）医師不足の解消（4）役割の明確化など、これを経営者を先頭に職員一致して取り組んだことに尽きると理解した。(遠藤)
- 安来市立病院も人口減少、医師不足、耐震対策など多くの課題を抱え、経営状態も厳しい状況にあります。今回三浦市立病院を視察たせてもらい、まだまだ安来市立病院でできることがあるのではないかとということがわかりました。たとえば事務局の改革。三浦市立病院では民間人を公募で募集し、民間人を事務長として採用し、事務局体制を変えることによって、事務局改革がすすめられたこと。また病院の財布の中が末端まで伝わる情報伝達の仕組みの構築。仕様の見直しや数の縮小、契約の見直しによる委託料の削減など、多くのヒントをもらいました。

最後に事務局長さんが言われたことは、

「やっぱり最後はトップの決断です。」ということでした。安来市立病院も今後の方向性を早く示し、将来の安来市医療をどうしていくのか、1日も早い決断が必要ということを改めて痛感しました。(作野)



以上